氏名	安藤　頼子	学校名	栃木県 宇都宮市立雀宮南小学校
担当教科等	全教科	対象学年（人数）	第 6 学年（68 名）
実践年月日もしくは期間（時数）		2019 年 7 月～10 月（10 時間）	

【実践概要】

1. 実践する教科・領域：総合/社会/外国語活動/家庭科/道徳/学活

2. 単元(活動)名：自分は何をすべきかを考える、国際理解教育

3. 授業のテーマ（タイトル）と単元目標

授業テーマ：わたしの生きる道　～世界では何が起こっている？自分はどうしたい？～

単元目標：

- 世界では途上国と先進国があることを知り、自分の生活は先進国や途上国と相互依存の関係の上に成り立っていることを理解する。
- 世界で問題になっていることは何かを知り、自分にできることはないか自分の事として考えられる態度を養う。

関連する学習指導要領上の目標：
「社会的事象について、主体的に学習の問題を解決しようとする態度や、よりよい社会を考え学習したことを社会生活に生かそうとする態度を養うとともに、多角的な思考や理解を通して、我が国の歴史や伝統を大切にして国を愛する心情、我が国の将来を担う国民としての自覚や平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きることの大切さについての自覚を養う。」（『小学校学習指導要領』第２章 各教科、第２節 社会、第６学年の目標及び内容（３））

4. 単元の評価規準	①知識及び技能	ネパールの文化や人々の考えを理解することができる。 料理や言語などを自分でも体験することができる。
	②思考力、判断力、表現力等	ネパールの文化や人々の生活を知り、自分たちとの共通点や相違点に気付き、良さや感じたことを表現することができる。 自分と違った生活や考えを持つ人々に対して、疎外せず認め合うことができる。
	③学びに向かう力、人間性等	世界には自分と同じような生活を送る人々、違った生活を送る人々がいることに気付き、関心を持って積極的に知ろうとしている。 自分には何ができるのか、自分の事として積極的に考えようとすることができる。

5. 単元設定の理由・単元の意義（児童/生徒観、教材観、指導観）

【単元設定の理由】
現在の殆どの児童は、何ひとつ不自由せず生活することができている。その生活が当たり前になってしまっていて、自分が興味のある分野にしか視点を置くことができず、世界どころか自分が住んでいる地域以外には目を向けることができていない。そこで実際のネパールでの経験をきっかけに、途上国という存在、日本との関係、問題点などを自分事として捉え、自身の生き方に目を向けてほしいと考えた。

【単元の意義】
世界の国々については英語や社会で扱っているが、本やインターネットからの情報を基にして学習を進めている。今回は実際に担任が体験した事実をもとに学習を進めることができるため、児童もイメージしやすく、自分事として捉えることができると期待したい。小学校高学年は自分の事以外にも他人の存在を強く自覚する時期である。自分が“普通”だと考えることは世界では“普通ではない”こともあることを自覚し、異文化であっても認め合うことが大切だと感じてほしい。

【児童／生徒観】
児童は素直で明るく、のびのびと学校生活を送っている。好奇心旺盛であり、吸収力も高く毎日の学習を意欲的に行っている。しかし将来のことを聞くと、殆どの児童が地域内の事しか答えられず、地域の外や海外にあまり関心が持つことができていない。知っている外国のことでも教科書に載っていることや、地理的なことだけに終始している。一部の児童は英語を習っているが、その目的は学習を有利に進めるため

	で、なかなか外国とのつながりを意識する機会がない。この学習をきっかけに、世界で起こっていることを知り、自分たちができることは何か真剣に考えるようになってほしい。 【指導観】 　ネパールは風土や気候は日本と似ているが、食文化やホームステイした住環境など日本と違った面も多く見られる。その点を児童に興味を持って受け入れてもらえるよう留意していきたい。また、ネパールは途上国であるが、ステイ先の家族の子供たちはおしゃれに夢中、YouTubeで音楽を聴く、宿題が大変…と日本の児童たちと同じ感覚を持っている。住む国は遠く離れているが、同じ人間だということが伝わるように写真や動画を使って児童に伝えていきたい。そして児童たちがこれから生きていく上で途上国の問題とどう向き合っていくのか、また青年海外協力隊の方の話を聞くことで国際親善に関わるという選択肢にも気付かせ、自分のキャリアを真剣に考えるように促していきたい。

6. 単元計画（全10時間）

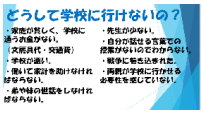
時	小単元名	学習のねらい	学習活動	資料など
1	社会・総合 「ネパールふしぎ発見！」	ネパールに対して興味関心をもつ。	・ネパールの概要を知り、人々がどんな生活をしているのか予測する。	・ネパールクイズ
2	外国語活動 「ネパールの友達へメッセージを送ろう」	遠く離れたネパールの子供達に関心をもち、自分が好きな日本をメッセージにする。	・日本の伝統品“うちわ”にメッセージを書く。 ・自分が好きなことなどについて、日本を知ってもらえるように内容を考え、英語で文章を書く。	・うちわ
3	社会・総合 「ネパール行ってみたらホントはこんな国だった」	ネパールの実情を知り、問題意識をもつ。	・人々、街の様子、学校の様子から自分たちと同じところ、違うところを考える。 ・ネパールが抱える問題について考える。	・街の様子の写真 ・子供たちの写真
4 ・ 5	家庭科 「ダルバート体験しよう」	ネパール料理を食べてみることで、自分たちと違う文化があること、その良さに気付く。	・ネパール米、ジャガイモを使ってダルバートを作る。 （ジャガイモのカレー粉炒め） ・手食文化の存在を知り、手を使って味わう。	・ネパール米 ・スパイス ・ステイ先の写真
6	社会・総合 「貿易ゲームをしよう」	先進国・途上国の存在を知り、それぞれの国は自分たちの生活にも密接に関わっていることに気付く。	・貿易ゲームを行い、世界の国々の関係を考える。 ・途上国の存在、自分たちの生活とのつながりを考える。	・貿易ゲーム（開発教育協会 DEAR）
7 本時	学活・社会 「学校に行きたい」	教育を受けられないとどんな問題が起こるのか考え、その問題に対して関心をもって考える態度を養う。	・文字が読めないことを体験する。 ・負の連鎖カードを並べ、教育が受けられないとどんな影響が出るのか考える。	・負の連鎖カード(JICA)
8	道徳 「エンザロ村のかまど」	青年海外協力隊について知る。 世界のために活躍する日本人がいることに気付く。	・エンザロ村のかまどを読み、青年海外協力隊について知る。 ・自分が考えたことを伝える。	・道徳の教科書

9	学活・社会 「青年海外協力隊とは」	青年海外協力隊の方の話を聞き、自分にできることを考えることができる。	・実際に青年海外協力隊の話を聞く。（助産師　大竹さん） ・考えたことを友達に伝える。	・JICA 出前講座
10	道徳 「幸せって何だろう」	幸せは人それぞれであることに気付く。 自分ができる少しの手助けが、他の人の幸せに繋がることに気付く。	・自分が考える「幸せダイヤモンドランキング」を作る。	

7.　本時の展開（7 時間目）

本時のねらい：

世界には学校に行きたくても行くことができない子供達がいることを知り、教育を受けられないとどんな問題が起こるのか考える。その問題に対して関心をもって考える態度を養う。

過程・時間	教員の働きかけ・発問および学習活動・指導形態	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 （5 分）	1. ネパールの学校の様子について振り返り、日本との違い、問題について確認する。 （教科、座席の位置、机、留年や進級試験がある、学校に来られない子供がいるなど）	・自分たちと同じ、違う点に着目できるようにする。 ・学校が好きであることや友達と楽しく勉強する気持ちは同じだということに気付かせる。	・パワーポイント ・ネパールの学校の様子の写真
展開 （30 分）	2. 本時の課題について確認する。 「学校に行きたい ～教育を受けるということ～」 3. 教育が受けられないことで、どんな問題が起こるのか考える。 ・文字が読めないということを実際に体験する。 ・負の連鎖カードを並べ、教育が受けられないとはどんなことなのか考える。	・文字が読めないことで社会から取り残されてしまうこと、危険な目にあってしまうことに気付かせる。 ・前時までに学習した日本と世界とのつながりも意識させるように促す。	  ・ネパール語の表示（水・薬・毒） ・負の連鎖カード【資料１】
	4. 教育上の問題について、行動を起こしている日本人（青年海外協力隊）がいることを知る。	・実際に海外で働いている人の存在を知り、どんな気持ちで働いているのか考えるよう促す。	

まとめ （10 分）	5. 本時の授業で考えたことを伝え合う。 6. 終末 ・実際に青年海外協力隊の方に来ていただき、話を聞く。 ・日本も震災の際はたくさんの国から支援を受けていることを知る。	・実際に来ていただくことを伝え、海外で働く身近な日本人について興味関心を持てるようにする。	・ワークシート 【資料２】

8. 評価規準に基づく本時の評価方法

・教育を受けられないことで発生する様々な問題を、意欲をもって考えることができたか。
［思考力・判断力・表現力等］

・問題意識を持って海外で働く日本人の存在を知ることで、国際親善に向かう態度を養うことができたか。
［学びに向かう力、人間性等］

9. 学習方法及び外部との連携

・単元計画の９時間目には、青年海外協力隊としてラオスで活躍された助産師の大竹さんに体験談を話して頂いた。実際に来校して頂き、ラオスの人たちの生活、病院での仕事内容を、具体的に写真を交えて話してもらうことで、児童は“海外で起きている問題に向き合い、何とかしたいと行動を起こして海外で活躍されている人がいる”ということを実感できていた。

10. 学校内外で国際理解教育・授業実践を広める取組

・内容をまとめ、異学年の児童が通る廊下にネパールの学校紹介、授業の内容を紹介する掲示コーナーを作って掲示した。

【ネパールからうちわの返事】

【ネパールの様子】

【自己評価】

11. 苦労した点	・日本と開発途上国を比較して、最後まで「日本に生まれて良かった」という優越感を述べるにとどまった児童が見られた。世界で起きている問題を、他人事として捉えることを払拭することができず、価値観を変えることの難しさを痛感した。
12. 改善点	・伝えたい内容が多すぎて、時間内に収まりきらない授業が多くあった。同じ内容の授業を２回行う際は、改めて内容を吟味して授業時間に収まるようにした。 ・相互依存を理解する授業のやり方をもっと工夫すればよかった。貿易ゲームだけでやると、国と国の格差を感じる児童が多くいた。日本も周囲の国に支えられていることをもっと強調すればよかったと感じている。

13. 成果が出た点	・テレビやネット上の動画ではなく、教員自身が撮影してきたネパールの街並みや人々の短い動画を実際に見せたことで、児童にはネパールという国の雰囲気が伝わり、興味関心を持つことができていた。 ・見たり聞いたりすることだけではなく、ネパール米を炊いたり、ダルバートを実際に食べたりしたことで、日本とネパールの文化の違いを実感し、抵抗なく受け入れることができていた。手食文化に抵抗感を示していた児童でも、実際にネパール米を前にすると抵抗なく挑戦する姿が見られ、異文化を受け入れることができていた。 ・日常生活では世界に目を向ける機会があまりない環境にいる児童でも、日本は世界とどうつながりがあるのか、貿易ゲームを通して少しずつ理解していった児童が多かった。 ・問題意識をもって海外で活躍されている人が自分の目の前で話してくれることで、海外で働くことや行動を起こすことの大切さを実感した児童が多くいた。
14. 学びの軌跡（児童生徒の反応、感想文、作文、ノートなど）	（授業前） ネパールという国は聞いたこともない児童も多く、イメージが全く沸かない児童がほとんどであった。インドに近いという地理的要因から「カレーが好き」「頭に白い布を巻いている」「貧乏」「裸足」という予測を立てた児童が多かった。また、食事を「手で食べる」という予想が出た時には、嫌悪感を示す児童が多数見られた。 （授業後） ≪ネパール行ってみたらホントはこんな国だった≫ ・ ネパールの学校生活は自分たちの生活と似ているところが多い。 ・ プログラミングの授業や職業訓練もしていて、自分達よりも難しい授業をしていてすごい。 ・ 学校に行くために親から離れて暮らしているなんて考えられない。 ・ 女子はおしゃれに興味があって、自分たちと同じだと思った。 ≪ダルバート体験をしよう≫ ・ 手で食べるなんて考えられなかったけど、やってみると楽しかった。 ・ 指先で口に入れるのが難しかった。ネパールの人はすごい。 ・ 料理の温かさを感じることができた。 ・ ネパール米はポロポロしていて、お箸では食べづらい。手を使って食べるのは理由があるのだとわかった。 ・ ネパール米とカレーがとても合う。毎日食べてもいいと思った。 ≪貿易ゲームをしよう≫ ・ どこの国でも結局貿易がないと、いつまでも同じような生活は送れないんじゃないかと思った。 ・ 国と国では持っている資源が違う。だからこそすべての国でまとまって協力していかなければならないと思った。自分たちや相手の国が幸せになるために、開発途上国にもっと支援して、やがて上下関係がなくなればいいのにと思った。 ・ どこの国も良いところがある。それぞれの良いところをのばしてあげればいい。 ≪学校に行きたい≫ ・ 学校に行けない→仕事ができない、という負の連鎖があり、私にはとても考えられない。世界には私と同い年だけど文字が読めない子もいると知り、悲しくなった。そんな人たちを助けてあげたいなと思った。日本も色々な国に助けてもらっているので、日本ももっと助けようと思うひとがいるといいなと思った。 ・ 学校に行けない人は社会で一人ぼっちになってしまうので、助けたいなと思った。

・　負の連鎖が起こらないように JICA や協力隊の人が助けているんだなと思った。私たちにできるのは何だろうと思った。

【負の連鎖カードを並べて考える】

≪青年海外協力隊とは≫

・　ラオスに行ってつらいこともあるけどがんばっていると言っていたので、大変なお仕事なんだなと思った。色々な人が色々な国の人を支援しているので、ぼくも青年海外協力隊に入ってみたいと思った。
・　生まれてすぐ亡くなってしまう赤ちゃんなど、私達には想像もできないくらいの悲しみを体験する人がいる中、私達には何ができるのかと考えさせられる話だった。私にもできることを積極的にしていこうと思った。
・　青年海外協力隊の方たちが行っていることや、どんな思いで活動しているのかが分かった。先進国と開発途上国の生活状きょうの差を、改めて知った。
・　大竹さんが「行動しなければ分からなかったことがある」と言っていたように、自分も考えたことは考えるだけじゃなく、それを行動に移していきたい。
・　今、私たちに何かできることがあるならば、私もその活動に参加したい。

【青年海外協力隊の大竹さんの話を聞く】

≪幸せって何だろう≫

・　国と国では宗教の教えや文化が違っているところから分かりあうことが難しいと考えていたけど、授業を受けてきて、かなりの部分の考え方は似ていると知った。
・　世界はとても広くてとても遠い存在だとおもってきたけど、勉強してみると好きなものなど同い年の性格は似ていて、世界は近いんだなと思った。誰もが幸せを望んでいるだろうから、世界のためにできること、他人のためにできることを考えて生活したい。
・　人を幸せにするには、身近なことから始める。そこから世界に広まっていくといいなと思った。
・　他の国の人を「かわいそうだな」と思っていましたが、これまでの授業を振り返ると「かわいそう」より「それぞれの幸せがあるんだな」と感じた。
・　幸せになるためには、まず身近なこと、友だちやいろんな人の考えを分かりあえるようになることが大切なんだなと思った。

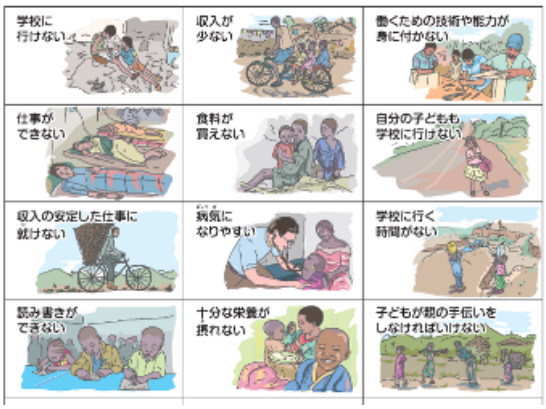
15.　授業者による自由記述	・教科書や映像で異文化理解を呼びかけてもなかなか難しいと日々感じていたが、子どもたちにとって身近な存在である教師が外国に行くことで世界がとても身近に感じてもらえると感じた。自分が書いたうちわが本当に外国の子どもの手に渡る、ということだけで感動した児童が多くいたことに驚いた。同様なことが言えるのがネパール米、スパイスを使用してダルバートを食べたときである。手食文化は抵抗があった子どもでも、ネパール米の香りをかいだだけで印象が変わったようで、すんなりと異文化を受け入れて楽しんでいた。日本のお米と比較して、形や味が違うことに子どもたち自身で気づいていた。異文化を体験するときには、「自分が体験する」ことが何よりも重要であると思う。 ・本単元では何よりもテレビのニュースでしか見たことのない青年海外協力隊の方が実際に目の前に来て、話してくれたことが児童の概念を変えた大きなきっかけになったと感じている。本単元を学習する前は、「働く＝地元で働く」ということしか頭になかった児童が、最後には外国に行ってみたい、協力隊員になってみたい、という感想がとても多くなったことに驚いた。児童の価値観をかえる小さな「きっかけ」を与えられたのではないかと手ごたえを感じた。 ・ありきたりの内容ではなく、自分自身が体験したことをそのまま伝えるだけでも授業は面白くなったし、何よりも児童の興味を引き付けることができた。 ・本研修に参加させていただき、今まで自分自身の価値観や考えを他の人の意見を聞くことで見直すことができ、自分自身の今後の生き方も考えさせられた。このような機会を頂けたことに心から感謝したい。

参考資料：

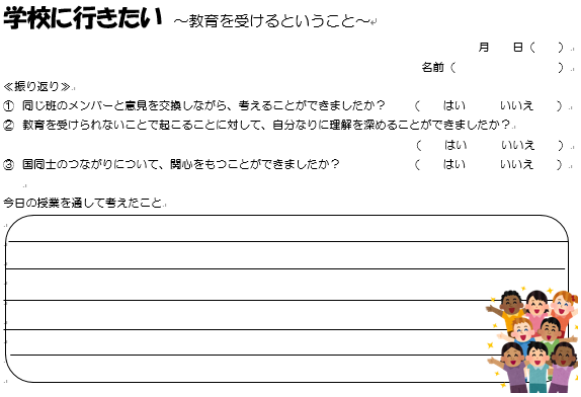
・　『国際理解教育実践資料集　～世界を知ろう！考えよう！～』JICA 地球ひろば
・　『よりよい未来をともに学び・ともに創る ファシリテーターのための参加型アクティビティ集 コミュニケーション編-他者に関わる力を育もう-』久世治靖　佐藤かおり 田口裕晃 鉄井宣人 二宮由布子 吉岡嗣晃 執筆、特定非営利活動法人 NIED・国際理解教育センター
・　『貿易ゲーム』特定非営利活動法人 開発教育協会(DEAR)、公益財団法人 かながわ国際交流財団

添付資料：

【資料１】負の連鎖カード



【資料２】ワークシート



学校に行きたい ～教育を受けるということ～

月　日（　）

名前（　　）

≪振り返り≫

① 同じ班のメンバーと意見を交換しながら、考えることができましたか？　（　はい　いいえ　）

② 教育を受けられないことで起こることに対して、自分なりに理解を深めることができましたか？

（　はい　いいえ　）

③ 国同士のつながりについて、関心をもつことができましたか？　（　はい　いいえ　）

今日の授業を通して考えたこと